

風景概念の基本構成

木 岡 伸 夫

序——構造論的観点から

「風景」の概念は、ある特定の社会に生まれ、歴史をつうじてさまざまな意味変化を伴いつつ展開されてきた。したがって風景の研究が、歴史的研究、それも主として文化史の見地からの実証的なアプローチに主導されてきたことは、この概念の来歴に照らして当然のことと考えられる。反面、これまでの研究に欠落しているのは、「風景とはそもそも何か」「風景の経験は、いかに形成されるか」といった本質論的な関心にもとづく形相的解明である。筆者はこの点に鑑み、「風景の哲学」を展開するための予備的作業として、過去の哲学において風景がなぜ主題化されなかったかを検討した⁽¹⁾。本稿ではそれにつづいて、「風景」を正当に哲学的主題として取り扱うために必要な基本概念の枠組を明らかにしたい。

以下の論述では、風景概念の基本構成を構造論的な観点に立つて行うべき理由をあとづける。第一に、歴史的に形成されたこの概念は、多重的な意味の層からなっている。平安時代に中国から日本に導入されたのは、「山水」に代表されるような「風景」の観念であった⁽²⁾。それが、江戸時代後期に西洋起源の文化、わけでも風景画と接するに及び、

風景の見方は大きく変化する。さらに明治以後の近代化の中で、後に詳細に論じるような「景觀」^③の意味内容が「風景」に重なり合い、融合してゆく。こうして風景と景觀は、ほぼ一体をなす概念として社会に浸透し、さまざまな文化的表現を生み出していった。

したがって本論では、まず混然一体化した意味の錯綜を解きほぐす作業から入りたい。風景と景觀は、歴史的文化的に異なる語用の文脈に由来する。それをふまえた意味論的な区別を明確に立てなければならぬ。しかしそうした意味論的区別の結果は、単なる概念の整理にとどまるものではない。そもそも風景の経験とは何であり、それはいかに成立するかということが、小論の関心事である以上、二つの語が表す意味的要素を経験自体の成立契機ととらえ、そのそれぞれが担う役割と相互の関係を解明するという手続きが要請されるだろう。すなわち、現に流通する意味から経験内容の展開へ、共時的観点から通時的観点へと視線を転じることが必要である。日本語の世界に「風景」と「景觀」の区別が存在するということは、こうした経験の動力学を追究する上で有効な手段を提供する。というのも、風景の経験を大きく主観的側面と客観的側面に分けてとらえる必要に依じて、二つの語をその両側面に適切に振り分けることができるからである。そう考えれば、風景と景觀の区別は方法論的にも重要な意義をもつことになると考えられる。

さて、風景の経験をその成立、発展変化の局面においてとらえるという狙いは、一つの構造論的アプローチを要請する。^④そうして構造論的な説明図式が成立すれば、それはある程度まですべての社会に敷衍できる可能性をもつだろう。ここで試みるのは、多元的な風景経験を、多様性が生じるその由縁に遡って論理的に解明する手続きであり、それは、なぜ社会によって風景のあり方が異なるのか、という文化論的疑問に根本的に答える試みである。したがって本稿の立場は、あらゆる文化の同一性を証示するという普遍主義でもなく、また個別事象の異質性分析に終始する個

別主義でもなく、それぞれの社会において異なる歴史的展開を生ぜしめる元となる〈型〉を提示するということである。〈型〉を生み出す契機は、個性的で特殊な〈形〉である。しかし個々の実践の所産ともいえる〈型〉から、こんどは種々に異なる〈形〉が生まれってくる。このような〈形〉と〈型〉の弁証法を考えるにあたり、風景を特殊な〈形〉に、景観を一般的な〈型〉に見立てることができるとすれば、二つの語の概念的区別は存在論的な観点においても十分な理由をもつことになる。

以上の見通しのもとに、「風景」と「景観」を中心に、風景哲学の骨格を構成する主要概念の批判にとりかかるところにしたい。

一 風景と景観

1 語用をめぐる状況

二つの語の使用をめぐることは、概念上の未整理に起因するある種の混乱が見られる。その実情に即して考えながら、徐々に意味論的な探索を進めてゆくという行き方をとることにしたい。大きく分けて一方には、「風景」と「景観」の間には本質的区別を必要とするほどの意味の違いは認められないとして、二つの語を無差別的に使用する人々がいる。そうかと思えば、両語の混用を避け、意図的にいずれか（多くは景観）のみに限定して使用する人々がいる。また少数ながら、両語に概念上の区別を施した上で、使い分けを図ろうとする人々が存在する——筆者もその一人である。

こうした実情に対して、さしあたり次の点を指摘しておきたい。第一の人々に対しては、すでにふれたように、日本語の歴史において風景と景観はその出自を異にしており、したがってそれぞれの語に帰せらるべき歴史的意味の相異を無視したのでは、風景経験の深部に肉薄することはできないだろう、と。また第二の人々に対しては、二語が日常的に混用され、意味の融合を生じている現実があるにもかかわらず、その一方を排除するということは、経験の恣意的な単純化ではないか、と。とはいえ、これらに対抗する最後の立場は、まだ十分な正当化の手続きが行われていない。いかなる理由で風景と景観が区別されねばならないかについて、説得力をもつ議論が要請される状況なのである。風景概念をめぐる現在の状況を整理するという意味で、代表的な事例に即して上の点を確認することにしよう。

一般に工学技術分野では、人文科学のように厳格な概念規定が要求されないという事情もあつてか、語の使い分けはそれほど厳密でないように見うけられる。それは必ずしも研究者個人の言葉のニュアンスに対する無関心、無感覚を表すものではない。たとえば、景観工学の専門家で「風景学」を提唱する中村良夫は、「風景」のもつ主観的含意に注意を払いながら、実際問題として両語の混用を自他に許すという態度を表明している。^⑤日本人の原風景をめぐる独自の考察を展開する樋口忠彦もまた、自己の専門分野における慣用語法にしたがつて、もっぱら「景観」を使用している。^⑥建築学・造園学・都市工学等の研究者にとつても事情は同じであり、「風景」との微妙な差異を意識する人々も、環境の設計や造形が問題になるほとんどの場合、専門用語として「景観」を用いるのが通例である。

概念規定と研究方法とが密接に関連する人文科学の領域では、語の使用に関してより自覚的な態度が表に現れてくる。この点を最も顕著に示しているのが、地理学の場合である。「景観」という語は、二十世紀初頭に植物学の領域で最初に使用された。しかしその後、景観はドイツ地理学の一分野である景観学 (Landschaftskunde) の中心概念 Landschaft の訳語として、地理学者に受け入れられ使用されてゆく。^⑦ Landschaft は、「地方行政区」の意味から転じ

て、さまざまな自然的要素（地形、気候、動植物）に規定された土地の状況を表す。それは、基本的には主観的な知覚から独立に存在する「客観的な土地の状況」という意味で、実証科学的方法によって扱われるべき対象とみなすことができる。日本の地理学がもっぱら「景観」を使用してきたのは、それがドイツ景観論における *Landschaft* の概念的本質を忠実に反映する訳語とみなされたからである。しかし、「景観」の原語である *Landschaft* あるいは *landscape* の意味内容は、ドイツや英米圏など諸地域における研究動向に影響され、変化を生じてゆく。たとえばドイツでは、一九二〇年代には「相貌」(*Physiognomie*)、三〇年代には「ゲシュタルト」(*Gestalt*) といった概念と結びつけられることによって、*Landschaft* にはそれまでになかった「主観的な構成」という性格が付与される⁽⁸⁾。つまりそれは、単なる客観的な土地の状態ではなく、人間による「世界の見方」(*a way of seeing the world*)⁽⁹⁾ が加わって⁽¹⁰⁾ はじめて成立するような地域のあり方と考えられるに至る。

二十世紀以降の人文地理学の展開を概念的に見れば、本稿が問題とするような風景と景観の意味上の重なりや融合に相当する事態が生起していることは明らかである。しかしこうした事情にもかかわらず、地理学研究者はおおむね、*Landschaft* (*landscape*) の内容を「景観」で代表させることに不都合を感じていないように見える⁽¹⁰⁾。それには種々の理由が考えられるが、最も大きな理由は、地理学的概念たるにふさわしい実証的なアプローチが、「景観」によって保証されるという判断であろう。それはいいかえれば、「風景」という日常化した用語のもつ複雑多様な意味含蓄、ニュアンスの全幅を、専門用語として概念的に整理し再構成する作業には手を着けないということである。「景観」という訳語の短い歴史に対し、「風景」にはたしかに平安時代以来の日本人の心性と文化の長い歴史が伴っている。そうした意味の古層を掘り起こしつつ、そこに現代的な学術用語としての装いを施す作業は、一朝一夕に片づくものではない。

2 意味論的観点

さて、以下最初に試みるのは、風景と景觀の意味論的區別である。さしあたって語義的な分析を考察の立脚点として。景觀が「日の光、影」を表す「景」と、「全体としての見え、外見」を意味する「観」から合成された和製漢語として、「白日の下での見え」を表すのに対し、それ自体として不可視な「風」を意味の核とする「風景」は、見姿でありながら見えないものの次元にかかわって存立する。すなわち、景觀がもつばら客観的に眼に見えるものを指すとすれば、風景は眼に見えず形として現れない何ものかとの関係を含む現象として、両者を區別することができ⁽¹⁾る。しかしそうした區別だけで話が済むわけではない。両語の間には意味上の區別が成立すると同時に、生きられる意味連関というものが存在するからである。

景觀が土地における事物の見えを指示するとしても、その全体が現に知覚されなければならないわけではない（それは不可能である）。景觀の本質は、土地および土地における事物の状況が、客観的に検証可能であるところにある。それが主体における知覚像として現出しているか否かは、第二義的な問題に過ぎない。直接的な認知に与らない場合でも、土地の状況は科学的な観察と記述の対象として、そこに客観的に実在するということができる。この意味での景觀は、「現象」ではない。風景を一種の現象とみなすならば、景觀はその対極における客観的実在である。客観的実在とは、表象されなくても存在することが確認されている事実であり、景觀はそうした意味での客観的実在を表すと考えられる。

景觀を事物の客観の様相として実在論的に理解しようとすれば、同じ対象が主観的には心に描かれる像、つまり表象として与えられるという事態が考えられる。実在論にいう「物」が、観念論では「表象」へと移行する。それでは、現実の真相は物なのか、それとも表象なのか。厳密な世界記述を追求する哲学は、従来、理論的整合性の要求に沿っ

て、現実を「物」か「表象」のいずれかに還元しようとしてきた。しかし、哲学ならぬ「常識」の水準にとどまる人々にとって、存在が実在（物）と観念（表象）のいずれかに一義化されねばならぬ必然性はない。事物はそれ自体としてそこにあると同時に、心に映る像としても存在するというのが、人々の日常的確信である。このような信念が成立するということは、実在としての事物と観念としての表象が、経験を構成する二つの契機として同時に共存することを物語っている。このことをふまえ、小論では実在論的な事物に関係する経験を「景観」に、観念論的な表象に関係する経験を「風景」に、それぞれ振り分けることを提案したい。これは、最初に立てた意味論的区別から、方法論的区別に移行するということを意味する。

3 「イメージ」としての風景

以上の考えは、別に新しい説ではない。ベルクソンが『物質と記憶』（一八九六年）の第一章で打ち出したイメージ論¹²の趣旨を、風景論の文脈に移して簡略に紹介したまでである。現代哲学の諸潮流は、デカルト以後の近代的二元論の克服を目標に掲げてそれぞれの理論的工夫を競っており、ベルクソンもその例外ではない。しかしその余人の及ばぬ独自性は、「イメージ」という語に客観的実在と主観的観念の両方の意味を含ませたところにある。

「私たちは、哲学者たちの論争を知らない人の観点に身を置く。このような人は生まれつき、物質とは彼が知覚するとおりに存在するものだ、と信じているだろう。そして物質をイメージとして知覚するのだから、物質は、それ自体、イメージであるとするだろう。ひと口にいえば、私たちは、観念論や実在論が存在と現象に分けてしまう以前の物質を考察するのだ¹³」

現代哲学の諸動向とつき合わせて、イメージ論の理論的正当性を検証するという手続きは略するが、このような「常識の徹底」という視点が、風景論的な世界記述にとってきわめて有効であることを指摘したい。第一に、イメージは、「物」と「表象」の中間 (mi-chemin) にある存在¹⁴、それゆえ事物と現象の両方の意味を併せもつ存在である。これは、實在論的な「景觀」と觀念論的な「風景」に跨る意味のすべてが、「イメージ」という一語に要約されるということ物語っている。この世界をイメージとして見よ、というベルクソンの呼びかけは、風景（景觀）論的に世界を認識することの正当性を、われわれに保証するものである。

イメージ論の意図は、物質を対象とする科学と意識の自己反省を主眼とする形而上学の双方に、それぞれの権利を保証しつつ、両者の統合を図ることにあった。この狙いを風景論の文脈に移してみれば、実証主義地理学と人文主義地理学の統合、さらには自然科学と人間科学の連携を推進する方向が開けてくる。そうして実際にその方向へと踏み出す試みが、すでに行われている。オギュスタン・ベルクの風土学がそれであり、彼の用いるキーワード「通態化」(trajection) は、まさしく上に述べたイメージ論と理論的前提および志向性を共有するものである。¹⁵

二 場所の経験

1 地理学——空間の科学

景觀と風景とは、実際にはほとんど同義語として使用されている。しかしその間に、われわれは有意味な区別を打ち立てた。前者は具体的事物の様相として実証科学的探究に開かれた対象であり、後者は心的次元に定位するため実

証主義的なアプローチに馴染まない性格の対象である。両者の理念的性格を対比的に明示した上で、必要な手続きは、現実に展開する「イメージ」を相互浸透の事実として把握することである。つまり二つの概念を線引きするだけでなく、かように識別された概念を用いて、風景経験の動的な構造、意味連関を記述することである。「景観」と「風景」は、その意味で独立の記述対象ではなく、構造連関の契機として緊密な関係のうちに捉えられなければならない。

では、そうした生の意味連関ないし構造連関は、どのように成立し進展するのか。この点に関して、景観と風景が成立するための基本条件となる諸概念を取り上げることしよう。問題となるのは、「空間」と「場所」である。

近代地理学の祖カール・リッターは、地理学の研究対象を地表に限定し、地表面における無機・有機・人間の諸現象の結合に関する「領域（空間）の原理」(räumliche Prinzip)を研究の目的とした⁽¹⁶⁾。これによって地理学には、「空間の科学」(science of space)という本質的性格が与えられた。一定の拡がりをもった土地とそこに存在する事物や人間主体の活動、これらのすべての要素が顕在的、潜在的に関係し合う範囲の全体が、地理学的な「空間」にはほかならない。したがって、具体的な活動領域である地表面を離れた無限空間としての宇宙は、基本的に地理学的な空間のカテゴリーには入らない。哲学的な空間概念との相違は、まずもってこの点にある。哲学的な空間概念の核心は、そうした事物の関係性ではなく、関係のネットワークが成立するための根本的制約である虚空、空無にある。しかしこの意味での空間を、そこにおいてすべての関係が可能になるという意味で、「可能的関係の図式」とみなすならば、地理学的な空間概念と哲学のそれとの相異は、実質的な関係に注目するか、関係の成立条件に注目するか、の視点の相違に過ぎないといえることができる。

そうして、空間内の関係が具体化するとともに、関係の主体がそこに位置づけられるような「場所」が生じてくると考えられる。とりわけ「住む」という観点から、場所に注目するのが、現象学的地理学である。イーファー・トゥア

ンによれば、空間と場所はたがいに不可分な意味連関のうちにある。¹⁷⁾場所は、「人がそこに住むことのできる対象」¹⁸⁾として空間から析出される一方、「空間は、限定され意味を与えられていくのに合わせて、場所に变化していく」¹⁹⁾。これを現象学的還元の不徹底に由来する二項対立的図式として、批判する立場もある。²⁰⁾しかし上に見たように、地理学における空間は抽象的・理念的空間ではなく、具体的な関係性の領域である。トゥアンの記述スタイルは、「現象学的」という触れ込みに反して自然的態度にとどまっているが、その反面、人文地理学的な常識としての空間概念に準拠することで、〈空間―場所〉の説明に生態学や人類学の知見を自在に取り込んでゆけるという強みをもつ。その立場において、空間と場所は〈全体〉と〈部分²¹⁾〉の関係を構成する。この関係は、後に見るように景観と風景の関係に対応する。われわれは、〈空間―場所〉の概念対を〈景観―風景〉のそれに重ねることで、より豊かな理論的展開を期待することができるだろう。しかしその議論に立ち入る前に、二つの概念の本質について哲学的な反省を加えておこう。

2 場所の存在論

空間と場所の関係について、原理的に二とおりの見方が成り立つ。無限の拡がりとしての空間が存在し、その中に種々の物体が位置づけられることよって場所が現出する——この考えは、いうまでもなく近代に生まれたニュートンの「絶対空間」や無限宇宙の観念にもとづいている。このように実質が無であるような抽象的な空間の概念を想定した場合は、存在論的に空間が場所に先行するという見方ができる。ところが同じ西欧世界でも、空虚が認められなかった古代ギリシアにおいて、空間は物体で充満した有限な拡がりにはかならなかった。このような有限な空間にあつては、「空間における位置」という意味の近代的な場所概念は成り立たない。たとえばプラトンの考えた宇宙は、無秩序で無定形な質料が充満した空間であり、そうした空間における「場所」(コーラ)は、生成がそこにおいて生

じるとされる条件であり、事物がそのものとして存在するために不可欠な一種の母型を意味していた。⁽²²⁾ この考えに従うなら、空間そのものが場所によって生み出される一種の物体であると考えられる。プラトンの場所概念から出発した場合、近代的宇宙観とは逆に、場所が空間に先行するといえることができる。⁽²³⁾

いま見たことを、風土という具体的な枠組の中で考えてみよう。すべての事物は、それが存在するための固有の場所、コーラをもつ。それはさしあたり、幾何学的空間の座標のような相対的な位置ではなく、「場所」でもトポスの場合に可能な他との交換や移動が考えられない、絶対的な場所である。⁽²⁴⁾ 人間身体についてはどうか。動物行動学が明らかにしたように、動物のほとんどは自己の生まれついた土地に繫縛された生を営む。それに対して人間は、自己の環境世界に規制され影響されると同時に、自由に環境に働きかけ、自己と環境のあり方とともに変えるという際立ったあり方をもつ。空虚で無限な空間は、人間が環境世界からの超越を実現し、行動の形式として「世界開放性」(Weltoffenheit)⁽²⁵⁾ を獲得したことの証拠である。してみれば、人間における〈空間―場所〉の関係は、第一に、閉じた有限な空間とコーラが表す〈定住〉の契機、第二に、開いた無限空間、「世界空間」(Weltraum) とトポスから生じる〈移動〉の契機、この二つの契機を内包すると考えられねばならない。

人間は身体をつうじて世界に住む。「住む」ことは、主体が場所に位置し、場所との関係を構成することである。しかしこの行為は、個別主体による単独の決定ではない。地域における一主体が、ある場所に住みつくことと、他の主体が別の場所に住むこととは、独立変数的事実として並立するのではなく、当の主体を含む全主体間の多様な作用関係によって多元決定される事実である。すなわち、Aが甲という場所を愛好して住むという決定は、Bが場所乙を愛好して住むというもう一つの決定と、時間空間において必然的に関連する。共同体においては、複数の主体が行う意思決定の結果、土地・人間・社会的現実の関係構造が成立する。この単純化された図式において、主体による意

思決定の過程を括弧に入れ、もっぱら空間的に展開された結果に注目した場合の社会関係が、Landschaft（土地の状況）であり、地理学的意味の「景観」であると考えることができる。景観とは、その成立に至る各主体の意識過程（主観性）を捨象して、空間的に展開された場所のネットワークを、それ自体として記述対象とした場合の、その客観的様相にほかならない。

これに対して、〈空間―場所〉の関係を、それ自体として客観的に見るのではなく、場所に住みつく主体の意識から捉えた場合、その意識に映じた土地の主観的な様相が「風景」である。こうしてわれわれは、客観性の極に景観を、主観性の極に風景を配置することによって、風景経験の認識論的秩序を具体的に定式化することができる²⁶。しかしなぜ客観としての景観が、それ自体で完結することなく、主観的な像としての風景によって二重化される必要があるのだろうか。それは、両者の間に一方から他方への移行が生じるからである。この点に関しては、前にイメージ論に言及したさいに、知覚される現実が「物」と「表象」の二重性を帯びた「イメージ」であるゆえんを明らかにした。その議論をふまえつつ、ここでは場所と記憶の関係から、風景経験のダイナミズムを考えてみたい。

3 場所の記憶

地域に住まう身体の相互的な関係が、場所のネットワークを形成することによって、土地全体の様相である景観が成立する。仮にそれを土地の見取図に喩えるなら、実際にその土地を隅々まで踏破して、土地の形状や事物の関係を把握することによって、見取図＝景観を描き出すことが必要となる。土地の全体的な描像を完成するためには、個々の知覚内容を重ね合わせつつ記憶に蓄えることによって、全体のイメージを紡ぎ出す能力、風景的構想力と称すべきものが働かねばならない。それは、見聞した事実を部分から全体へと統合する仕方です。「場所の記憶」を組織化する

働きであるということが出来る。

ここでもわれわれは、ベルクソンの記憶理論を参照することができる。このような場所の記憶を蓄積する第一の主役は、記憶装置としての身体である。身体は自己の運動をつうじて過去を反復再現する感覚²⁸運動機構を具えており、これをつうじて過去は習慣的に再現される。場所の記憶に関して、より本質的な役割を担う第二の主役は、独立的記憶を保持し表象する「純粹記憶」(memoire pure)である。この働きによつて、見聞された土地の記憶は心像として隨時甦ることが可能となる。身体による過去の再演と独立的な表象の想起は、本来別個の機能であるが、たがいに干渉し合い協力することによつて、過去の再認が実効的なものとなる。たとえば、学課の朗読を繰り返すことによつて、学課そのものが頭に入るとともに(第一の身体的記憶)、一回一回の読みの記憶が残る(第二の表象的記憶)。

「場所の記憶」はいかに再構成されるか。ベルクソンの「形而上学入門」では、「画家がノートルダム寺院の塔をスケッチするという例が挙げられる。²⁹画家は実際にパリを訪れ、都市の全体からある種の直観を得て、それをもとにノートルダムのスケッチを試みる。このとき彼の制作を導くのは、全体的直観である。しかし、現実に彼が描きとめるのは、パリやノートルダムの全体ではなく、寺院の一部、塔でしかない。画家のスケッチは、通常の見物人と同じく、特定の視点から仰ぎ見られた塔のシルエットを写すにとどまる。それはベルクソンのいうとおり、事物の「外面的、図式的な再現³⁰」である。

では、こうした「図式」としてのスケッチには、表現的価値は存在しないのだろうか。重要なことは、分析の観点と直観の観点とを区別することである。分析の観点は、あたかもジグソーパズルを嵌め込むように、事物の断片的要素をもつて全体を構成しようと試みる。この操作は、当然ながら予め全体が与えられていなければ成功しない。しかしまの例では、ノートルダム寺院やパリの全体が、すでに要素の集合体として存在するわけではない。画家の出発

点は、全体についての印象、直観である。そのスケッチは、いずれもがこの全体的な直観を、特殊な視点から表現することをめざしているという点で、「部分的表現」とみなされる。つまりその部分は、全体から還元された記号的要素ではなく、全体を志向する一個の自己完結的表現なのである。

4 全体と部分、〈型〉と〈形〉

いま見たような全体と部分の関係を、景觀と風景の關係に重ねてみるができるだろう。Landschaftが意味するものは、事物が同時存在する土地の状況、事物に「充たされた空間」(erfüllte Raum)³¹であった。地理学的研究の対象である空間、まとまりをもった地域は、それを全体として俯瞰する視点に立った場合、まさしく景觀そのものである。そうして地域がまとまりある全体として限定されるということは、ベルクソンの意味での全体的直観に与えるということである(その種の直観なしには、そもそも「地域」という概念が成立しないだろう)。イメージ論を参照したわれわれは、イメージが「物」であるとともに「表象」でもあること、この両面がベルクのいう意味で「通態的」(trajectif)であることを認めた。景觀が「物」という性格において、実証科学的な研究に開かれる一方、風景は心的な「表象」として、象徴的な意味の体系に關係するということも確認した。右の例におけるノートルダムスケッチは、ある場所における一定のスペースペクティヴを具えた知覚であるという点で、後者の面におけるイメージを表している。そのように全体の直観に根ざして成立する部分的表現を、ここで風景の本質として規定しよう。そのうえで、風景と景觀の關係を次のように考えてみたい。

実を言えば、場所の記憶を一枚のスケッチに擬えるのは適切ではない。記憶の中の風景は、一般に多数の心的イメージの重なりや融合から生まれる、多様性を孕む動的な形象である。しかし、記憶が特定の土地に結びつくとき、多

種多様なイメージは一つに統合され、土地の全体像を構成してゆく。そこに部分から全体へ、風景から景観への移行が生じると考えられる。たとえば、富士山のイメージは、ときには河口湖に映る逆さ富士であり、また田子の浦から眺められる広大な裾野の姿である。ときには現実の知覚に代わり、梅原龍三郎の赤富士や北斎の富嶽三十六景が想起されることもある。さらには、富士をめぐる古今のさまざまな文学的表現もまた、われわれにとって富士の記憶の一角を占めている。それらのイメージは、富士という一つの場所をめぐる無数の差異の表現、すなわち〈形〉を意味するといえよう。無数の〈形〉が成り立つのは、それらが志向する究極の「物自体」、「富士そのもの」が存在するからである。³² もろもろの〈形〉がめざすこのような理念を、〈型〉と呼ぶことができよう。〈形〉の連なりは、その先に一つの〈型〉を予想する。また一つの〈型〉からは、種々に異なる〈形〉が導き出される。風景と景観の間には、このような〈形〉と〈型〉のダイナミックな関係を想定することができる。このような関係は、先に見た意味論的な区別とは異なる、発生論的ないし存在論的な秩序を表している。景観と風景を関係づける論理のうち、文化の形成と構造化の過程を追究するという目的に照らして最大の理論的展望が得られるのは、この存在論的な観点からの区別である。

三 風景概念の構成に向けて

1 三つの次元

景観と風景にかんする概念的区別が、いかなる意味をもつかを論じてきた。本稿では三つの次元において両概念を区別した。すなわち、(1) 意味論的次元、(2) 方法論的次元、(3) 存在論的次元である。各次元はそれだけで閉

じることなく、他と内的に関連し合っている。それぞれの内容を確認しながら、相互のつながりを確かめることにしよう。

第一に、両語は共通の意味成素「景」において、白日の下の見え姿を表す。景觀は統一的な外見を意味する「観」と結合することで、「まとまりのある事物の見え」を表す。地理学的概念である *Landschaft* (landscape) にこの語が充てられたのは、土地の状況が単なる知覚的現実ではなく、どこまでも客観化可能な記述対象として存在するからである。これに対して風景は、「風」の意味する雰囲気、気分を要素を含んだ視覚内容である。この語はしたがって、不可視的な次元にかかわる経験を指示する。景觀が客観的で可視的な対象を指示するのに対し、風景は本質的に「見えないもの」を指向する。

だが、こうした区別が成立するのは、あくまでも理念の水準においてである。日常的な語用において、客観的な景觀と主観的な風景は、たがいにその意味内容を交換し合い相互浸透する。風景と景觀は、歴史をつうじて渾然一体の概念領域を形づくってきた。ここでわれわれに必要な手続きは、こうした両義性が生じる源である、生きられる風景経験の内実を解析することである。この作業は、方法論的次元における両概念の区別を要求する。参照したベルクソンのイメージ論は、知覚に「表象」と「物」の両義性を認めるものであった。小論はこの考えを援用し、風景経験の総体を、主観性を帯びた「風景」と客観的な「景觀」に分け、それぞれに固有な意味の秩序を追求するという方法論的区別を提起した。この両面作戦に乗じることによって、経験を抽象化し貧困化する還元主義に陥ることなく、風景と景觀のいずれの意味をも生かすことが可能になると考えられる。

この第二の方法論的区別により、物的な景觀と心的な風景の成立基盤がともに保証され、それぞれに該当する研究領域や方法を割り当てることが可能になる。したがってたとえば、景觀地理学と現象学的地理学の間、しかるべき

線引きを行うことも可能になるだろう。⁽³⁸⁾ しかしながら、そうした領域的区分のみでは、本質論的解明を期すことはできない。なぜなら、風景の哲学が引き受けるべき課題は、いかにして風景経験が成立・発展・変容するかという、動態論的な論理の構築だからである。最初に断ったように、それは風景の構造化を見すえた構造論的アプローチを要求するが、そこでは風景と景観の動的相関性の論理、また相互転換の論理が不可欠である。ここに新たに発生論的・存在論的区別が重要性をもってくる。

風景の経験は、基本的に次の三つの方向に展開すると考えられる。

(Ⅰ) 個人主体における展開

(Ⅱ) 個人的経験から集团的経験への展開

(Ⅲ) 集团的経験から個人的経験への展開

風景の経験は、個人内部では完結しない。一個人のもとで風景が生起するとき、同時にそれを生起せしめる広大で根深い社会的経験の基盤が働いている。個別的経験と集合的経験とは、いずれが先でいずれが後かを決定することが不可能な仕方⁽³⁹⁾で、相互に規定的である。個人から集団への展開を考えた場合、内的に経験される風景が、次第に一般性を帯びてゆく過程を想定することができる。個々の多様な〈形〉が、一般的な〈型〉へと収斂する方向である。先に見たごとく、この場合の〈形〉を風景、〈型〉を景観として区別するなら、人々の風景経験のうちには安定した景観を志向するベクトルが働いていると考えられる。しかるに、〈形〉と〈型〉の間には、〈形〉から〈型〉が生まれ、〈型〉にもとづいて〈形〉が成立するといった構造的秩序が機能する反面、個々の〈形〉を〈型〉が否定したり、それに反発して〈形〉が〈型〉を打破するといった〈型破り〉の契機が潜んでいる。このような関係においては、安定した構造的秩序は維持されず、構造全体にゆらぎと変動が生じることになる。こうした構造の生成変化を分析記述し、

歴史的な存在論へと考察を進めるには、風景と景観を相関項とする経験の動力学に手がかりを求めることが適當であろう。

2 〈生きられる風景〉の構造契機

風景概念の基本構成を示すという本稿の目的に沿って、〈生きられる風景〉の構造化にかかわる次の三種の契機を挙げておく。

①基本風景

②原風景

③表現的風景

以上のうち、「基本風景」は純粹に個人的な水準へと送り返された風景経験を意味する。ただしそのことは、個人の経験する風景が純粹に個人の風景であるということを意味しない。すでに述べたように、個人の経験のうちには社会的な経験が入り込み、それに一般的な意味を与えている。私がある風景を体験するということは、ある程度まで社会の図式に従って環境を知覚しているということである。しかし、どのように集団的な図式が機能していても、各自がそれぞれの生きる場所において体験する風景を、「私の風景」と呼ぶことは可能である。他から独立したアトムの個人の想定が虚構であると同じく、個が集団の全体のうち³⁵に解消されるという想定も虚構に過ぎない。それゆえここでは、記述的順序として、さしあたり個人から出発する方法論的な個人主義を採用することにした。すると、「私が風景を見ている」という事実が意識されるとき、当然第一人称の刻印を付された「私の風景」が成立すると考えられる。しかしそうした人称的風景が、はたして原本的第一次的な性格をもつかどうかは疑わしい。なぜなら、それは

主体から対象を分離することによって主客の関係を打ち立てる言語的意識に媒介された経験だからである。それに対して、言語的媒介以前に即目的に生きられる風景、逆説的ながら、「誰の」という意識を伴わずに私によって生きられている風景を、「基本風景」と呼ぼう³⁶。この匿名的で前人称的な経験は、社会的実践である言語行為をつうじて、ほかならぬ〈この私の〉風景へと転じるけれども、そうした言語化以前の基層を含めた経験全体を個人的水準でとらえたものが、ここでいう基本風景なのである。

この第一の構造契機は、しかし理念的にのみ集合的社会的な経験の水準から区別される。現実には生きられるのは、大半がすでに社会的な〈型〉によって規定された経験である。この面を考へるとき、われわれは第一の個人的水準に対して、第二の社会的共同性の水準に定位する風景経験を構想しないわけにはゆかない。こうして個人を超えた社会的な風景として想定されるのが、「原風景」である³⁷。原風景は、言語経験に媒介されることによって組織化された意味のシステム、いわば「語られる風景」³⁸である。このような第二の契機への移行は、個々の身体によって演じられる暗黙的实践から語りの共同行為が展開することによって成し遂げられる。こうして生じる原風景は、しかし語りの水準にとどまるかぎり、いまだ制度化された〈型〉としての地位を確立していない。物語行為は、たとえ反復されても一過性にとどまるかぎり、〈痕跡〉としての社会的記憶を残さないだろう。したがって、原風景が文化的な規範性を獲得するためには、さらに第三の構造契機が働かねばならない。それが「表現的風景」である。

一般に風景として語られるのは、すべて表現された風景である。人は、ゴッホの描いた麦畑も若草山から見下ろされる東大寺大仏殿も、等しく風景としてとらえる。一方はアルル地方において制作された絵画であり、他方は肉眼がいまこの場所で成立させる知覚である。だが、それが〈表現〉であることにおいて、二種の風景経験は共通する。違いは、前者がゴッホという唯一の作者の生みだした個性的表現であるのに対し、後者は数多の主体が場所における所

作を反復再演することによって仕上げた文化的表現、多数の作者による〈作品〉であるという点にある。表現的風景は、いま見られるだけでなく、すでに見られてきたものである。いいかえればそれは、公共化された「場所の記憶」、社会的な記憶である。それは、たとえ明示的に喚起されることがなくとも、潜在的な母型として人々の意識を支配し、それを一定の方向 (sens)³⁹⁾ に向けて整備する。絵画・写真・映像・文学・音楽等のメディアは、それ自体が既存の表現によって方向づけられつつ、今度は自らが新たな表現行為をつうじて、人々の社会的感性を方向づける役割を果たそうとする。

3 構造の弁証法

以上三種のうち、「基本風景」は沈黙のうちに生きられる前言語的経験である。これに対して、「原風景」と「表現的風景」は、いずれも広義の言語による媒介を経るという点で共通する。では、両者の本質的相違点はどこにあるのか。

原風景は個人的日常的な実践に根をもち、自己の体験の深みから語り出される初次的な風景経験である。そこには、語りをともしする共同体⁴⁰⁾が存在するから、語られるのは〈私の風景〉のみならず〈汝の風景〉、さらに〈われわれの風景〉である、という共同的性格が濃厚である。語られる内容は「原体験」であるが、それが語り出されるきっかけは、体験からの〈距離〉——時空両方における——である。したがって原風景とは、しばしばもはや喪われた生に対する追懐、哀惜にほかならない。基本風景という個の実践の水準とつながり、私の存在の根拠につながる意味をもつのが、原風景である。原風景が私の存在に根をもち、したがってどこまでも〈私のもの〉もしくは〈私たちのもの〉という第一人称性を付きまとわせるのに対して、一般的に表現的風景は、すでにそこにあるという意味での第三人称

的風景を意味する。それを生み出した原動力は、社会内の傑出した個性にあるが、いったん文化的表現として人々に受容され、社会に定着した後は、公共性をもつ一種の制度として機能し、人々のものの見方を一定の方向に誘導し規制する。

三つの風景経験をそれぞれ詳細に論じることが、別稿に委ねなければならない。論明されるべきは、各構造契機がもつ固有の存在論的意義と、三つの契機間に成立する動的な構造連関である。基本風景から原風景がどのようにして発生するか。また原風景から表現的風景への移行はいかにして生じるのか。これは、個々の多様な〈形〉である風景から、〈型〉としての景観が生成する〈上昇〉の過程と考えることができる。そうして表現的風景を〈制度〉としての風景とみなした場合、文化的表現である景観は、社会および個人の実践にどのような影響を及ぼすのか。こちらは、〈型〉が〈形〉を支配し方向づける〈下降〉の過程である。風景哲学には、このように構造連関における〈上昇〉と〈下降〉の弁証法を明らかにするという課題が与えられていることを、最後に確認しておこう。

注

- (1) 「風景」概念の哲学的反省『関西大学哲学』第25号、関西大学哲学会、近刊予定。
- (2) 唐代に生まれた「風景」(fengjing)は、近代中国語では西欧近代的な意味(本稿では「景観」がそれを表す)に定義されており、日本語の「風景」とは意味の差異を生じている。この語と「山水」(shanshui)との関係等に関しては、オギュスタン・ベルク『土の日本』篠田勝英訳、一九九二年、一九五―七頁 (Augustin Berque, *Le sauvage et l'artifice : Les Japonais devant la nature*, Paris, Gallimard, 1997, pp.155-7) に詳細な解説が見られる。
- (3) Landschaft : paysage : landscape 等の意味内容は、日本語の「風景」と「景観」の両方に跨るものの、以下の本論で論じるように、より優勢的には「景観」に代表されると考えるべき理由がある。
- (4) ここで「構造」として想定されるのは、相対的安定性をもった歴史的社会的な〈型〉と変動する個別の〈形〉との動的連関、

弁証法である。この着想の源泉は、西田哲学の「形の論理」にあるが、より現代的な表現型として、ピエール・ブルデューのハビトゥス (*habitus*) を挙げることもできる (P. Bourdieu, *Le sens pratique*, Paris, Minuit, 1980. P. ブルデュ『実践感覚』1・2、今村仁司・港道隆訳、みすず書房、一九八八年)。

(5) 中村は、「風景」のもつ「風合い」のような意味的含蓄を切り離れた概念が「景観」であり、「景観」という語を便宜上用いるけれども、「私の話した「景観」は「風景」に置きかえて結構です」と言っている (田路貴浩編『環境の解釈学』、学芸出版社、二〇〇三年、一三二―一三五頁)。中村自身の関心は、「景観工学を育てる豊かな土壌」としての新しい学問を「風景学」として育てたいというところ、風景経験が含む人間の意味の具体化へと向けられている (『風景学入門』、中公新書、一九八二年、「あとがき」参照)。

(6) 樋口忠彦『日本の景観』、ちくま学芸文庫、一九九三年。

(7) 地理学者辻村太郎は、植物学者三好学が植物群落の「相観」 (*Physiognomie*) を言い表すために「景観」の語を用いたと証言している。しかし辻村は、自身が「景観」を *Landschaft* の訳語として使用した当人であるもかわらず、後に「景観は独逸語の *Landschaft* に対して、植物学者の三好博士が与へられた名称である」という事実を反した記述を行っている。こうした複雑な事情に関しては、岡田俊裕『近現代日本地理学思想史』、古今書院、一九九二年、一八三―一四頁、を参照。なお *Landschaft* (*landscape*) の訳語の変遷に関しては、山野正彦『ドイツ景観論の生成』、古今書院、一九九八年、一一頁、の注2に比較的詳しい言及がある。

(8) 山野正彦「景観の「相貌」と「ゲシュタルト」——1920・30年代ドイツにおける景観論の展開」、『人文地理』第42巻第2号、一九九〇年、五〇―七一頁。

(9) これはイギリスの文化地理学者コスグローブ (D. Cosgrove) による「景観」 (*landscape*) の定義である。山野前掲書 (註(7))、二二頁、を参照。

(10) とはいえ景観概念自体が、地理学内部で一種の躰きの石となっていることも事実である。千田稔は、「地域統一」としての景観は、「近代科学の分析手法にはなじまない」とした上で、「今、人文主義地理学の対象となるものは、風景でなければならぬ」 (千田編『風景の文化誌Ⅰ』古今書院、一九九八年、「序 景観と風景」と主張するが、風景が地理学の専門用語として担うべき意味価値は何ら規定されずに終わっている。現象学的地理学の立場をとる阿部一は、景観を父性志向的、風景を母性志向的な「見かた」に結びつけるが、そうした区別が地理学の概念体系にどう位置づけられるかは定かでない (「主観と景観―現象学的地理学

の立場―、『地理科学』vol.51, no.3, 1996, pp.169-174)。これら以外に、両概念に関する理論的解明の貴重な試みとして、若松司「風景」と「景観」の理論的検討と中上健次の「路地」解釈の一試論、『都市文化研究』4号、二〇〇四年、五六七二頁、を挙げておきたい。

(11) 拙稿において、この区別を提示したことがある（「沈黙と語りのあいだ」、佐藤康邦・安彦一恵編『風景の哲学』、ナカニシヤ書店、二〇〇二年、三七―五六頁）。前註(10)の若松論文は、これに閲読して、筆者が「風景」に帰したような主観的意味が、西洋的な *Landschaft* の概念にも認められるという点を、フンボルトやジンメルの名を挙げつつ指摘している。同論文五九頁、および七〇頁(注4)を参照。ただし筆者の行う意味論的区別は、二つの語の指示内容を理念的に単純化したものであり、語用論的な現実を二分しようとするものではない。実際には両語の意味内容は、相互浸透して見分けがたいものとなっている。

(12) Henri Bergson, *Matière et mémoire*, Paris, P.U.F., 1968, 『ベルグソン全集2・物質と記憶』、田島節夫訳、白水社、一九六五年。もともと、このイメージ論は従来の哲学的思考に囚われた読者から多大の誤解を招いたために、ベルグソンは新たに第七版の序文において詳細な補足説明を行わねばならなかった。

(13) *Ibid.*, p.2, 同訳書六頁(ただし、「イメージ」を「イメージ」に変更した)。

(14) *Ibid.*, p.1, 同訳書五頁。

(15) ベルク自身は、自己の立場とイメージ論の共通性について、以下の箇所でも控えめに言及している。Berque, *Du geste à la cité*, Paris, Gallimard, 1993, 227-8, 『都市の日本』、宮原信・荒木亨訳、筑摩書房、一九九六年、二七四頁。

(16) 水津一朗『新訂 近代地理学の開拓者たち』、地人書房、一九八四年、「I カール・リッター」(とりわけ、一六―七頁)を参照。

(17) 「場所」という観念を定義するためには「空間」という観念がなければならないし、「空間」という観念を定義するためには「場所」という観念がなければならない」(『空間の経験』、山本浩訳、ちくま学芸文庫、一九九三年、一七頁)。

(18) 同書二九頁。

(19) 同書二三九頁。

(20) 阿部一「景観・場所・物語―現象学的景観研究に向けての試論―」、『地理学評論』63A-7、一九九〇年、四五―六頁。

(21) *The Dictionary of Human Geography* (4th ed. by R.J. Johnston, et al., Oxford, Blackwell, 2000, p.582) の *place* の *place* 「地理的空間の部分」(a portion of geographic space) という簡明な規定が与えられている。

- (22) 「これ(コーラ)は滅亡を受け入れることなく、およそ生成する限りのすべてのものにその座を提供し、しかし自分自身は、一種の擬いの推理とでもいうようなものによって、感覚には頼らずに捉えられるものなのでして、ほとんど所信の対象にもならないものなのです」(プラトン「ティマイオス」52A-B, 種山恭子訳、『プラトン全集12』、岩波書店、一九七五年、八四頁)。
- (23) ベルクは、風土性(médiancé)を古典的な場所概念にもとづいて説明する。アリストテレスのいうトポスは、事物の同一性にかかわる「土性」(topicité)に結びつき、風土に固有の存在の仕方である「風性」(chorésie)は、プラトンのコーラに由来するとする。Bergue, *Écumenisme — Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris, Belin, 2000。『風土学序説』中山元訳、筑摩書房、二〇〇二年、「第一章 場所」を参照。
- (24) 物理的場所としてのトポスに対して、コーラは事物がその本来のあり方において存在するための母型である。中澤務は、『ティマイオス』のテキスト読解に即して、この意味でのコーラは「アイデアが感覚的世界の中に似姿として受肉する」ための装置であると解釈する。この解釈は、アイデアを風土性の核となるコーラのあり方、「風性」から切り離すベルクの理解とは鋭く対立する。両者の主張をめぐっては、『国際シンポジウム〈風土と技術の近代〉報告書』(関西大学文学部哲学合同研究室、二〇〇五年)、一六一—二七頁、を参照。
- (25) Max Scherer, »Die Stellung des Menschen im Kosmos«, *Späte Schriften (Gesammelte Werke Bd.9)*, Bern, Francke, 1976 (「宇宙における人間の地位」、亀井裕・山本達訳、『シェーラー著作集13』、白水社、一九七七年)。
- (26) 風景経験の成立と展開は、後述するように、基本風景・原風景・表現的風景の三つの段階から成る。この三種の経験は、継時的秩序であるとともに、同時に共在する構造連関の契機を意味する。いずれの段階においても、風景と景観の認識論的区別が可能である。
- (27) このテーマについては、拙稿「場所と記憶—規範の生成をめぐって」、『人間存在論』第三号、京都大学大学院人間・環境学研究所／総合人間学部、一九九七年、を参照されたい。
- (28) 以下、身体と記憶をめぐる本節の考察は、ほぼ全面的にベルクソン『物質と記憶』(註(12)参照)の「第二章 イメージの再認について—記憶と脳」によって行っている。
- (29) 《Introduction à la métaphysique》(1903), *La pensée et le mouvant*, Paris, P.U.F., 79^e éd., 1969, 「形而上学入門」、坂田徳男訳、『世界の名著53 ベルクソン』、中央公論社、一九六九年。付言すれば、ベルクソンの意図はこうした事例を引いて、経験主義的

な心理学が科学的な分析と形而上学的な直観の立場を混同している点を批判することであった。

(30) *Ibid.*, p.191, 同訳書七七頁。

(31) 水津前掲書一六頁(ただし、訳語は当方の判断で若干変えてある)。

(32) 人間の眼は一定の視角からの部分的視覚像しか得ることができないが、あらゆる角度からすべてを見渡すような〈神の眼〉を想定することができる。たとえば高度一万メートルの上空から撮られた航空写真は、それ自体はむしろ土地の全体像ではないが、神の視線によって捉えられる理想的全体像のイメージを提供するに足る。「地表の科学」としての地理学が、地域(空間)の全体像を景観という理念に仕上げた背景には、均質空間の観念と科学技術によって現実のものとなった俯瞰的な世界視線の存在がある。

(33) 現実には、景観概念の内容・用法をめぐって地理学界内部での統一見解は出されていない。一九九五年に開かれた地理科学学会主宰のシンポジウム「景観論のフロンティア——現代における知のクロスロード」(『地理科学』vol.51, no.3, 1996, pp.147-204)は、このテーマをめぐる有力な論者の意見を集約しているが、「景観」の多義性を引き切るだけの議論は展開されていない。地理学内で「風景」にまだ市民権が与えられていないこともあって、本稿が提起するような〈棲み分け〉の着想は見あたらぬ。

(34) 後期の西田哲学は、この事実を弁証法的な一般者と個物の関係という観点から、歴史的世界の論理構造として説明しようとした。和辻倫理学における「間柄」も、社会空間の中で個と全体とが、ただ相互規定的にのみ存在するという事実を意味している。次註(35)参照。

(35) 人の「間柄」を根源的事実と考えた和辻の倫理学において、独立自存の個人と「個人を否定的に含むのでない全体者」は、いずれも仮構物であるとみなされた。その人間存在論は、「個人も全体もその真相においては「空」であり、そうしてその空が絶対的全体性なのである」(『和辻哲郎全集第十巻 倫理学・上』、二六頁、岩波書店、一九六二年)という空観に貫かれている。

(36) ベルクは、言語的媒介をつうじて表現される一般的な風景の手前に、「人類学的共通基盤」としての「元風景」(proto-paysage)を想定する(『日本の風景・西欧の景観』、篠田勝英訳、講談社現代新書、一九九〇年、第一章)。筆者のいう基本風景は、理念的水準にとどまる元風景とは異なり、実際に個々人の身体をつうじて生きられる具体的で個性的差異を帯びた風景を意味する。個的な基本風景と類的な元風景がいかに関係するかは、改めて検討するべき重要な主題である。

(37) 原風景を集団ではなく、個人の水準で考える立場も存在する。原風景を個人的なものとする高橋義孝は、それと区別される

普遍的な「原光景」という概念を提起している。前註(11)に挙げた拙稿「沈黙と語りのあいだ」(『風景の哲学』、五五―六頁(註16))、を参照。

(38) うらがえしてみれば、一般に「物語」として分類される文化的行為を、風景の制作としてとらえることができる。じつさい原風景を背景にもたない物語はなく、物語を内に孕むことのない原風景も存在しないからである。

(39) ベルクは場所の意味(sense)に関して、「方向」と「意味」を兼ねた「おもむき」という訳語を充てている。表現的風景の核心は、まさしく場所の趣き、風趣にほかならない。

(40) 「風土」として限定される地域共同体にかぎらず、時間的な共同性にかかわる同じ年代、「世代」もまた、この種の語りを共有する。共同性を構成する動機や理由はさまざまであり、成立する共同体を構成する主体も多様でありうるところに、原風景の多元的な存在性格が認められる。